

「口腔がんは日常生活にも影響が大きい。東京医科大学歯科大学大学院の顎がん」
 「口腔外科の小村健教授は治療について、「治療率を上げるとともにQOL（生活の質）が重要」と話す。最近では失われた部分を元の状態に近づける再建手術も進歩しているという。」

「口腔がんにはどんな種類がありますか。」
 「もっとも発生頻度が高いのは舌（せつ）がん、口腔がんの約半分を占めます。次いで歯肉がんが多く、二〇％を占めます。口腔底がん（舌の底）と粘膜炎がん（舌の裏）は各一〇―一五％を占めます。これらは狭義の口腔がんですが、広い意味では口唇がんや、唾液腺がん（唾液をつくる組織にできる唾液腺がん）も含まれます。」

「国内患者数は推定で毎年五千―六千人。一般に中高年に多く、六十歳以上が約四〇％を占めます。最近では二十―三十歳の若い人も増えています。男性の方が多く、女性の二・五―一

口腔の健康③ 口腔がん



東京医科歯科大学大学院教授
小村 健氏

「原因は何ですか。」
 「よく分かっていますが、喫煙と飲酒は大きな危険因子と考えられています。」

「また、虫歯や義歯の症状がありますか。」
 「初期のうちは、しじりや腫れ、潰瘍（かいよう）がみられ、塩辛いものや刺

白斑で、大きさは様々。七―一〇％は十年ぐらいのうちになん化する可能性があります。赤斑の紅板症はすでに九割方がんの状態といってもいい病変です。扁平苔癬は白いレース状で、数％ががん化する可能性があります。」

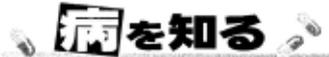
「早期にはどのような診断を受けてください。」
 「どのような治療をしますか。」
 「治療法には外科手術、放射線治療、化学療法（抗がん剤）などがあり、悪性度や病期（がんの広がり）などから最適な治療法を選びます。複数を組み合わせた場合もあります。口腔がんは頭（けい）部リンパ節（首のリンパ節）にもっとも高い腫瘍率で転移を起すので、転移が強く疑われる場合はこれを取り除く手術もします。」

会話・飲食：生活への影響大きく

再建術、着実に進歩

「がんに変化する可能性がある。舌、歯肉、口腔底、頬粘膜、口蓋、口唇、唾液腺。舌、歯肉、口腔底、頬粘膜、口蓋、口唇、唾液腺。舌、歯肉、口腔底、頬粘膜、口蓋、口唇、唾液腺。舌、歯肉、口腔底、頬粘膜、口蓋、口唇、唾液腺。」

「また口腔は日常生活を大きく支えているので、形や外観にも関係するので、QOLと深くかかわります。治療率を上げることも機能障害を術を開発、現在症例を増やして検証中だ。うがい液中にはがん細胞に特有の遺伝子から見つけ出す手法で、早期口腔がんの九〇％以上を発見できたという。がんでない人が陽性に、多数のスクリーニングに有効とみている。」



種類	できる場所
舌がん	舌
歯肉がん	上あごと下あごの歯肉
口腔底がん	舌と歯肉の間
頬粘膜がん	ほおの内側
口蓋がん	口の中の天井部分
口唇がん	唇
唾液腺がん	口腔内にある小唾液腺、顎下（がっか）腺、舌下（げっか）腺など唾液をつくる組織

編集委員 賀川雅人

産経新聞
2008年8月19日(火)

小村教授